

校長室の窓から

ふるさと自慢!

先般、先輩の校長先生から「上五島に来て1年半が過ぎたから長崎県PTA新聞の『ふるさと自慢』のコーナーに“上五島の自慢”を書いてみないか」と話をいただきました。そんな事があったからでしょうか。些細な出来事が頭に残りました。それは、出張帰りの船の中のことです。船にはずいぶん慣れてきたとはいえ、さすがに2時間半もの時間は退屈なものです。なんととはなしに、近くに席を構えた4人組に目がいきましました。耳に入る言葉からは、上五島にある若い女性の実家に、若い男性とその両親が挨拶にうかがう道中であることが分かりました。おそらく、婚儀の相談でしょう。いささかの緊張や照れが混じった“ぎこちなさ”を好ましく感じていると、父親が女性に「上五島はどんなところ？」と尋ねました。答えが気になり、さらに聞き耳をそばだてていると、女性は、「特に自慢するような事は何も無いところですよ」と答えました。謙虚な答えには、うら若き女性ならではの上品さや風情が感じられて、うっとりとしさせられたのですが、東浦の子どもたちが同じ質問を受けたときに、どんな答えを返すのが気になりました。

皆さんの「上五島ふるさと自慢」は何ですか？そんな話題を肴に話を弾ませてみたいものですね。ちなみに私の「ふるさと（上五島）自慢」は後日紹介します！

こんな子を見つけました!

10月27日に開催しました学習発表会には、保護者の皆さんをはじめ、おじいちゃん・おばあちゃん、地域の皆さんなど総勢120名を超える方々に来校をいただきました。ありがとうございました。おかげさまで、子どもたちも存分に練習の成果を発揮していたように思います。常々、子どもたちには自信…苦しいことがあっても逃がらずに努力することができる自分への自信です…をもって欲しいと願っています。前日までの懸命な練習のおかげでしょう。当日の子どもたちの顔は自信に溢れ、頼もしく感じました。この子達が通う学校に勤めることのできる幸せを噛みしめていました。どの学年も素晴らしいのですが、ここでは、特に私が感動した6年生の発表を紹介します。

6年生は、修学旅行で、世界でたった2カ所だけ原爆の被害を受けた長崎県の子どもとして平和を学習してきました。そして、そこで学んだ事を伝えようと思いました。

何を伝えたいのかを問い、どうすれば気持ちがいっそう伝えられるのか文章の構成を考え、伝えるための声や話し方を工夫しました。そして、さらに磨くためにグループで吟味し合いながら1つの意見文をまとめました。とても小学生

が書いたとは思えない素晴らしい文章の数々は、6年生が真摯に取り組んできた事を証明しています。平和について真剣に考え、多くの皆さんの前で発表するという事は、決してたやすい事ではありません。大人の私たちにさえ、ためられるほどの難しいことです。それを立派にやってのけた最上級生に、心から拍手を贈りました。紙面の都合で、1つだけ紹介します。6年生のDNさん、TMさん、TYさん、HNさんの共同作品です。

山里小の『あの子らの碑』に思う

今の山里小学校は、昔と違いのどかな様子だ。しかし、昔も、1945年8月9日午前11時2分までは、戦争とはいえ、まだ、のどかな今里小学校だったのだが。

戦争の始まりは、各国が自分の国の領有地を広げようと武力を使用したことだった。世界のたくさんの国が参戦し、第二次世界大戦となった。昭和20年8月9日午前11時2分、長崎市に一発の原子爆弾が投下された。山里小学校の子どもたちは1300人も亡くなり、運動場は土が見えない程に倒れた多くの人で埋め尽くされていた。私たちが訪れた現在の山里小学校は、子どもたちが外で絵を描いたり、元氣よく歌を歌ったりして、とても幸せそうな様子だった。

山里小学校には、3つの防空壕が残されているが、戦争当時は12カ所もあった。子どもたちは空襲警報が鳴る度に、防空壕に逃げ込んだ。その中は、とても狭く、暗く、みんなが中に入るときぎゅうぎゅう詰めだったという。また、防空壕の中に隠れていても、熱線と熱風で壁に叩きつけられたという。

生き残った子どもたちは、原爆の事を作文に書き、みんなで本を作った。そして、その本を売ったお金と、永井博士が寄付くださったお金で、今の「あの子らの碑」が立てられた。「あの子らの碑」には、当時、山里小学校に起こった悲劇を決して忘れないという気持ちと平和への願いが込められている。

私は、小さな事から大きな事までのすべてが平和に繋がると考えている。ケンカをしてはいけない仲直りしたり、のどかな自然があったり、それも平和だ。どこの国の人とも繋がることができるような仲の良い暮らしをし、今を生きることが未来の平和へと繋がっていると思う。長崎は、原爆の恐ろしさを世界中の人に、未来の人々に伝えてくれる場所だ。

子どもたちに、表現する力を身に付けさせたいと全職員一丸となって取り組んでいます。はじめは「人前で話す事に慣れさせたい」そんな素朴な目標からスタートしますが、最上級生になるときは、「自分の深い思いを真剣に伝える事のできる子どもにしたい」と願っています。今回の6年生の姿は、私たちの願いのゴールが垣間見えた気がして、いっそう嬉しい瞬間でした。